

これをはじめて、秩父、足利、三浦、鎌倉、党には猪俣、児玉、野井与、横山、西党、都筑党、私の党の兵ども、惣じて源平乱れ合ひ、いれかへいれかへ、名のりかへ名のりかへ、をめきさけぶ声、山を響かし、馬の馳せちがふ音はいかづちの如し、射ちがふる矢は雨のふるにことならず。手負をば肩にかけ、うしろへひきしりぞくもあり。うすで負うてたかふもあり。いた手負うて討死する者もあり。あるいはおしならべて組んでおち、さしちがへて死ぬるもあり。あるいはとっておさへて頸をかくもあり、かかるもあり。いづれひまありとも見えざりけり。

かかりしかども、源氏大手ばかりではかなふべしともみえざりしに、九郎御曹司義経搦手にまはって、七日の日のあけぼのに、一の谷のうしろ鶉越にうちあがり、すでにおとさんとし給ふに、その勢にや驚きたりけん、大鹿二つ、妻鹿一つ、平家の城郭一の谷へぞ落ちたりける。城のうちの兵ども是を見て、「里ちかからん鹿だにも、我らにおそれては山ふかうこそ入るべきに、これ程の大勢のなかへ鹿のおちやうこそあやしけれ。いかさまにも上の山より源氏おとすにこそ」とぞさわぎける。

御曹司、城郭じょうかくはるかに見わたいておはしけるが、「馬ども落といてみむ」とて、鞍置馬を追ひ落とす。或は足をうち折って、ころんで落つ。或は相違なく落ちてゆくもあり。鞍置馬三疋、越中前司が屋形のうへにおちついて、身ぶるひしてぞ立ったりける。御曹司これを見て、「馬どもはぬしぬしが心得ておとさうには損ずまじいぞ。くはおとせ。義経を手本にせよ」とて、まづ三十騎ばかり、まっさきかけて落とされけり。大勢みなつづいておとす。後陣ごじんに落とす人々の鎧の鼻は、先陣の鎧甲よろいかぶとにあたるほどなり。小石まじりのすなごなれば、ながれ落としに二町ばかりざっと落として壇なる所にひかへたり。それより下を見くだせば、大盤石だいはんしゃくの苔むしたるが、つるべ落としに十四五丈ぞくだつた。兵どもうしろへとってかへすべきやうもなし。又さきへ落とすべしとも見えず。「ここぞ最後」と申してあきれてひかへたるところに、佐原十郎義連よしすすみいでて申しけるは、「三浦の方で我らは鳥一つたてても朝夕かやうの所をこそ馳せありけ。三浦の方の馬場や」とて、まっさきかけて落としければ、兵どもみなつづいて落とす。ゑいゑい声をしのびにして、馬に力を

これをはじめとして、秩父、足利、三浦、鎌倉、党には猪俣、児玉、野井与、横山、西党、都筑党、私の党の兵たち、すべての源平の軍勢が入り乱れて、入れ替わり入れ替わり、名のりをあげ名のりをあげ、わめきさけぶ声が山を響かせ、馬が駆け回る音は雷のごとく、飛び交う矢は降る雨のようだ。負傷した者を肩にかけ、うしろに下がる者もいる。軽傷を負って戦う者もいる。重傷を負って討ち死にする者もいる。あるいは馬を並べ組み合せて落ち、差し違えて死ぬる者もいる。あるいは取り押さえて頸を斬る者も、斬られる者もいる。源平いずれも隙があるとは思えなかった。

それでも、源氏は大手から攻めるだけではとてもかなわないと思われたところ、義経が背後にまわって、七日の日の明けがたに、一の谷のうしろの鶉越に上がり、今にも降りようとなさったところ、その軍勢に驚いたのだろうか、大鹿が二匹、女鹿が一匹、平家の城郭がある一の谷に降りていった。城の中にいる兵たちがこれを見て、「人里近くにいるような鹿でさえ、我らを恐れて山奥に入るはずなのに、これほど大勢がいる中に鹿が降りてくるのはおかしい。きっと上の山から源氏が降りてくるにちがいない」とさわいだ。

義経は平家の砦を高い所から見わたしていたが、「馬たちを降ろしてみよう」と言って、鞍置馬を追い落とす。あるいは足を折って、ころげ落ちる。あるいは問題なく降りていく馬もいた。鞍置馬三匹が、越中前司盛俊の屋形の上のあたりに着いて、身ぶるいて立っていた。義経はこれを見て、「馬たちは、乗り手が注意して進ませれば怪我はしないようだ。では降りよう。わたしを手本にせよ」と言って、まづ三十騎ほどが、まっさきかけて降りていった。多くのものが皆続いて降りる。後から降りる人々の鎧の端が、先に降りた人々の鎧甲かぶとにあたるほどである。小石まじりの砂なので、滑り降りるように二百メートルぐらいざっと降りて、壇のようになった所でとまった。そこから下を見下ろすと、苔むしている大きな岩が、つるべ落としのように四十メートルぐらい切り立っている。武士たちは後戻りもできない。また前進して降りることもできそうにない。「ここで終わりか」と言って途方にくれてとまっていると、佐原十郎義連がすすみで言うには、「三浦の地で我らは鳥一羽飛ぶのを狩ろうと朝夕このような所を駆けまわっている。三浦の馬場と同じだ」と言って、まっさき駆けて降りていったので、武士たちはみな続いて降りる。えいえいというかけ声を小声で言って、馬を上げまして降りる。

つけて落とす。あまりのいぶせさに、目をふさいでぞ落としける。おほかた人のしわざとは見えず。ただ鬼神の所為とぞ見えたりける。落としもはてねば関をどっとつくる。三千余騎が声なれど、山びこにこたへて十万余騎とぞきこえける。村上の判官代基国が手より火をいだし、平家の屋形、仮屋をみな焼き払ふ。をりふし風ははげしし、黒煙おしかくれば、平氏の軍兵ども、あまりにあわてさわいで、もしや助かると前の海へぞ多く馳せ入りける。汀にはまうけ舟いくらもありけれども、われさきに乗らうど、舟一艘には物具したる者どもが四五百人、千人ばかり込み乗らうに、なじかはよかるべき。汀よりわづかに三町ばかりおしおいて、目の前に大船三艘沈みにけり。其後は、「よき人をば乗すとも、雑人どもをば乗すべからず」とて、太刀長刀で薙がせけり。かくする事とは知りながら、乗せじとする舟にとりつき、つかみつき、或は腕うちきられ、或はひぢうちおとされて、一の谷の汀に朱になってぞ並みふしたる。

能登守教経は、度々のいくさに一度も不覚せぬ人の、今度はいかが思はれけん、うす黒といふ馬に乗り、西をさいてぞ落ち給ふ。

あまりに恐ろしいので、目を閉じて降りた。まったく人間業とは思えない。あたかも鬼神の仕業と見えていた。下まで降りきらないうちに関の声をどっとあげた。三千騎あまりの声だが、山びこがこたへて十万余騎あまりに聞こえた。村上の判官代基国の手の者が火をつけ、平家の屋形、仮屋をすべて焼き払う。ちょうどその時は風がはげしく、黒煙がおしかけるので、平氏の軍勢は、あまりにあわてさわいで、もしや助かるかと前の海に大勢が駆け入った。汀には前もって用意していた舟がいくつもあったが、われさきに乗ろうと、舟一艘に武具をつけた者が四、五百人、千人ぐらい乗ろうとするので、どうしてうまくいくだろうか。汀からわずかに三百メートルほどすすんで、目の前で大きな船が三艘沈んでしまった。そのあとは、「身分の高い人は乗せてもよいが、雑人たちを乗せてはならない」と言って、太刀長刀を横に払って斬った。こうするとわかっていながら、乗せまいとする舟にとりつき、つかみつき、あるいは腕を斬られ、あるいはひぢを斬りおとされて、一の谷の汀に血まみれになって並んで横たわった。

能登守教経は、数々の戦さで一度も不覚をとったことがない人だが、今度はどう思っただろうか、うす黒という馬に乗り、西をさして逃げていった。